

荒野を目指す

かんごろう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデアに召喚された新宿のアヴェンジャー。
その、戦う理由。

目次

荒野を目指す

如何にして、その召喚が成され得たのか。

狼王にとっても、カルデアにとっても、それは不可解な出来事であった。

まず第一として、彼は英霊足り得るのか。その時点で、大きな疑問が残る。

彼の身は幻霊のツギハギ。輝かしい武勲とも功績ともかけ離れた、単なる怨念の集合体に近い。

そして彼には、人理を守護する意志がない。かたちはどうあれ、英雄にも反英雄にも存在する、「人の世を存続させよう」という思考が、微塵もない。

当然だ。

彼は人に対する憎悪の塊。

人を殺す――ただそれだけの指向を、研ぎ澄まし、磨き上げ、英雄を圧倒し得る力に昇華させた復讐者。

英霊の座に登録されること自体が、世界の気まぐれ、あるいはエラーとしか考えられない。

狼王は、そういう存在だった。

狼王を喚ぶことを試みたカルデアのマスター。

彼もまた、異常を抱えている。

少なくとも、狼王はそう捉えた。

狼王は、臙げながら覚えている。

新宿幻霊事件。彼の二度目の生誕の時。そして獣としての己が死んだ日。

人理を守る少年を、この爪で引き裂きたいという欲求――それが、あの時の狼王の全てであった。

ひたすらに飢え、渴き、欲していた。少年を殺して満たされる訳がないことも承知していた。しかし、噴き出す憎悪は止まらず、また止める理由もなかった。

結果として、狼王は不覚を取り、その殺意が成果を残すことはなかった。

それでも、少年が狼王に対して、好意的な感情を抱く余地はなかったはずだ。

恐れ、怒り、良くて憐憫。

その辺りが関の山であろう。そうでなくてはおかしい。

故に、異常なのである。

少年が、狼王を喚ぶと決めたことも。

この身が、それに応じたことも。

いずれも、狼王の理解を超えていた。

くくく

「小さい時に、君の物語を読んだことがあるんだ」

ある時、少年はそう語った。

召喚されたものの手を貸す意思はない。忌々しい令呪の強制でもなければ、立ち上がりさえするまい。

相互理解の一切を不要と断じた狼王は、その時の少年の言葉も話半分で聞いていた。

「マシユも……ああ、俺のパートナーなんだけど。彼女も、読んだことがあるって言ってた。それで、君が人を憎むのも無理はない、人は君にとっても残酷なことをした……って、悲しそうな顔をしてた」

ぐる、と小さな唸り声が差し込まれる。

憐れまれる筋合いはない。それは、狼王の憎悪を募らせるだけのもの。人のエゴだ。

それ以上勘違いを続けるなら——この身が消えても構うまい——この爪で以って八つ裂きにしてくれる。狼王は、魔力すら孕んだ瞳で少年を睨んだ。

「……けど、俺は何か違うと思った。マシユの気持ちはわかるけど、俺が感じたものとはズレてるような……そんな気がして」

少年は、後ずさることもなく、どこか熱っぽく言葉を繋いだ。

「俺は、綺麗だと思ったんだ」

虚を、突かれた。

どす黒い海に沈殿するだけの狼王の世界に、空白が生まれた。

人の生活を脅かす悪魔を討つ。そのために、卑劣にも妻を殺して誘き出す。目論見通り捕らわれた悪魔は、人の施しを受けずに死亡する。ああ、我々はこんな誇り高い者に、酷いことをしたのかもしれない……そんな物語だった。聖杯から得た知識では、そんな一方的な話だったはずだ。

そこに、美しいものなどあつたらうか。

狼王の動揺を知ってか知らずか、少年は語り続ける。

「狼の王は、自由に生き切ったと思つた。人なんて知つたことかと、好きに荒野を駆けていた。捕まつた後でも、誰一人王様を縛れなかつた。死ぬまで、王様は屈しなかつた……いや、それも違うのかな。そういう最期も受け入れたんじゃないか……って感じたんだ。失つた悲しみに沈んだんじゃない。戦いきつたと、ほくそ笑んで果てたんじゃないか……俺は、そう思つたんだよ」

走馬灯を見ているようだった。

靄のかかつたかつての記憶、憎悪に塗りつぶされた荒野の景色が、僅かながらも色を取り戻す。

王国を破壊された怒り。それはあつただらう。

妻を殺された憤り。無論なかつたはずがない。

しかし、と狼王は思い起こす。

死の間際にあつたものはそれだったのか？

憎悪と復讐心のみを抱いて逝つたのか？

――そうではない。

あの賢しくも逞しい侵略者から、一切引かなかつたという矜持があつた。

生まれ育つた荒野に身を沈めることを誇りに思つた。

身を灼く憎悪に嘘はない。

だが、それだけではなかつた。それが狼王の全てではなかつた。それを指して、少年は繰り返すのだ。

君は綺麗だった、と。

王は、静かに立ち上がっていた。

くくく

「アヴェンジャー……そっちよろしくー！」

マスターの指示が発せられるよりも早く、包囲から逃れた魔獣を振り伏せる。甲殻にも似た硬い皮膚が、紙細工のように裂かれていく。

他愛のない獲物に、狼王はフンと鼻を鳴らした。

「ありがとう。今ので最後だったみたいだ」

少年の劳いに、狼王は視線のみで答える。少年は、一つ頷いて、彼を待つ他のサーヴァントの下へ戻った。

彼の屈託のない笑顔に、本能のような敵意と殺意が鎌首をもたげることが、狼王はそれを理性で制御する。蓄積させ、しかるべき時に解放すればよい。方向性を得た狼王の力は、かつてを大きく上回っていた。それが少年の力になるのなら、と彼は柄でもないことを考える。

あの日、狼王は小さな野望を抱いた。

その成就のためには、少年を取り巻くしがらみ、残された戦いの処理は、避けて通れないものだった。

故に、狼王は少年と戦うことを選んだ。

野望といっても、瑣末なことだ。彼自身、そう感じている。

しかし、それが黒く粘つく海の中で見つけた一筋の光であることに変わりはない。

恐らく、それを達するために、この身は召喚に応じたのだろう。

少年と共に、カランポアの荒野へ帰る。

それが、今の狼王が抱く唯一の願いだ。

あの景色を、どうか見て欲しい。

この身を綺麗だと評した君に。

感じて欲しい。触れて欲しい。
あの美しさに、その身を浸して吠えて欲しい。
そして、どうか誇らせてくれ。
萌え立つ春の緑を。
照り返す夏の陽を。
吹き荒ぶ秋の風を。
透き通る冬の空を。

ここが私の、生きた場所だと。